

「仕合わせ」と地域ウェルビーイング 小値賀島における“よそ者”受入の実践から

村上 昂音

Shiawase and Community Well-being: Insights from Practices of Hosting Newcomers on Ojika Island

Koon MURAKAMI

<長崎県立大学 国際社会学部>

抄録/概要/要旨

本論は、「仕合わせ」という偶然性や関係性を含んだ概念と、近代的に数量化される「ウェルビーイング」とを結びつけられるのか、という問いに対し、小値賀島の観光・交流の取り組みを事例に検討したものである。小値賀では、古民家ステイや民泊、教育旅行といった小規模で分散型のプログラムが長年継続され、行政・協会・住民が協力して運営する仕組みが定着している。分析では、「量より質」「縁の制度化」「住民の望む速度」という三つの視点から、小値賀の取り組みを資料や計画書、住民への聞き取りなどをもとに整理し、その特徴を明らかにした。その結果、偶然の出会いが縁となって重なり合い、住民の誇りや生活の節度を守りながら地域の暮らしの豊かさに寄与している過程が確認できた。すなわち「仕合わせ」とは、数値では捉えきれない、人と人とのつながりが積み重なって生まれる仕組みを説明する概念として位置づけられる。

キーワード：仕合わせ；ウェルビーイング；よそ者；小値賀町

■研究論文

1. 序論

私が「仕合せ」という言葉に関心を持ったのは、実を言えば、ある偶然の読書体験がきっかけであった。清水幾太郎(1995)『私の文章の作法』のなかで、清水は自らがインテリの家庭に生まれたわけではなかったことを、むしろ「仕合せ」であると記している¹。私は思わず立ち止まった。なぜ、「幸せ」ではなく、「仕合わせ」と書いたのだろうか。単なる古風な言い回しなのか。いや、どうもそれだけではない気がした。この小さな疑問に答えるために資料をたどっていくうちに、私は電流が走るような衝撃を覚えた。それは研究の方向を決定づける契機となった。「幸せ：為合せ」の語源は、「物事の成り行きがうまく合うこと」「巡り合わせがよいこと」という意味。平安時代には「仕合せ」「為合せ」と書かれ、必ずしも「幸福」だけを意味せず、結果「運命」「成之」という幅広い意味を持っていた。そう考えると、今日の「幸せ」はどうだろう。英語のハッピーに近い、明るくて、前向きで、肯定的な響きに満ちている。だが、「仕合せ」は違う。そこには偶然や環境、どうにもならない力が絡みついている。清水が「幸せ」でなく「仕合せ」と記した理由も、ようやく自分なりに腑に落ちた。

一方、観光研究や地域研究の分野では、近年 QOL (Quality of Life 生活の質、以下 QOL と記す) や「幸福感」「ウェルネス」といった概念を用いて、地域のウェルビーイングを論じる試みが増えている。では、この「ウェルビーイング」という言葉はどこから来たのか。OED (Oxford English Dictionary、以下 OED と記す) をひもとくと、最古の使用例は1561年、トマス・ホビーによるイタリア語訳(Castiglione『Il Cortegiano』)に見いだされる²。そこでは *esser* (存在) と *ben esser* (善き存在) が対比されており、注記として残されている。

OED はさらに、この単語に三つの意味をあげている。第一は「よく在ること」で、存在が健やかに、満ち足りている状態。第二は、人や共同体について用いる場合で、健康・幸福・繁栄、つまり身体的・心理的・道徳的な福利を指す。現代ではもっとも広く使われるのはこの意味である。第三は、より限定されて、身体的あるいは物質的な快適さや健康を意味する。生活条件や経済的安定に焦点が置かれる場合である。

こうして見れば、ウェルビーイングという言葉は広がりを持ちながらも、現代では主に「測れる幸福」として理解されている。しかし、そうした近代的な概念は、人間の生活に避けられない偶然や巡り合わせを十分に捉えているだろうか。むしろそこに欠けているものがあるのではないか。幸福

を数量化して測ろうとするウェルビーイングと、偶然性や関係性を含む「仕合わせ」とを、どう結びつけることができるのか。そこに、私の問いが生まれたのである。

こうしてパズルとパズルを合わせ、本論の課題が明らかになった。すなわち、近代的に数量化される「ウェルビーイング」と、偶然の巡り合わせとしての「仕合わせ」とを接合することである。その接合の場として、私は地域社会(本論では、長崎県小値賀町)を取り上げ、とりわけ「よそ者」と地域住民の関係に注目したい。“よそ者”との出会いは、望ましいこともあれば、望ましくないこともある。摩擦や葛藤を伴いながらも、新たな「仕合わせ」を生み出す契機となる。そこに地域ウェルビーイングの可能性が開かれるのではないか。

2. 先行研究と理論的枠組み

2.1 ウェルビーイング研究の展開

ウェルビーイングの理論は、古代ギリシャとヨーロッパの哲学にまで遡ることができる。そこには、二つの哲学的背景がある。一つは、ギリシャ語の「快楽」を意味する「*hedone*」に由来する快楽主義、すなわち「ヘドニク」である。これは目の前にある快楽をできるだけ享受し、苦痛を避けることを幸福とみなす考え方である。実際、ショッピングや飲食、娯楽といった観光の典型的な楽しみは、この系譜に即して理解できる。もう一つは、ユーダイモニクである。ユーダイモニア(*Eudaimonia*)は、はアリストテレスに代表される思想で、人間の成長や徳の実践、意味ある行為を通してこそ幸福に至ると説かれる。たとえば、巡礼やボランティアツーリズム、自己研鑽を伴う滞在型のリトリートは、この系譜に近いものとされている(Smith & Diekmann, 2017)。

西洋思想の長い伝統を振り返れば、幸福やウェルビーイングの理解は、快楽、調和、徳、宗教的救済、公共的幸福、人生の意味など、時代とともに、姿を変えてきた。しかしどの時代でも、共通するのは、「良い人生とは、主観的な満足と客観的な条件の両立に支えられている」という点である(Michalos & Weijers, 2017)。私自身、この「両立」という視点には強く共感する。なぜなら、フィールド調査で出会った人々の語りにも、生活の手触りと社会的な基盤の両方が響き合っている場面をしばしば見てきたからである。

哲学的な議論に戻ると、スタンフォード哲学百科事典において、「幸福(happiness)は、しばしば、一時的な感情を意味するが、ウェルビーイングは人生全体の質を問う概念である」と述べる。そこでは「ウェルビーイングとは、その人にとって本当に良いこと」とされ、快楽説・欲求充足説・

¹ 原文「私の両親も、インテリなどというものではありませんでした。妙な言い方ですが、私は、それを大変に仕合せな事だと考えています。」(清水 1995: 170)

² 原文 1561: *I will not nowe speake of the profit that the worlde hath by women beeing the beeing of children, for it is well inough declared howe necessarye they be, not onely to oure*

beeinge [Italian esser], but also to oure well beeinge [Italian ben esser]. Baldassarre Castiglione • The courtier of Count Baldessar Castilio • (translated by Thomas Hoby) · 1st edition, 1561 (1 vol.) https://www.oed.com/dictionary/well-being_n?tl=true&tab=meaning_and_use 2025年9月4日アクセス。

客観的価値説という三つの立場から理論化されてきた。功利主義においては「幸福を最大化すべきか否か」が中核的な問題となったが、この点をめぐっては批判もある。G.E. Moore (1903) は「善 good」は非人物的 (impersonal) な価値であると指摘した。私の理解を交えて言い直せば、「X は私にとって善い」と言っても、結局は「X そのものが善い」のか、それとも「私が X を持つことが善い」のかと言い換えているにすぎず、“for me” という付け足しには固有の意味はない、という指摘である。したがって、善の問題は「誰かにとって」ではなく「それ自体が善いか否か」であるべきだとしたのである、その Moore の主張に対して、Scanlon (1998) は契約主義の立場から「誰も合理的に拒否できない原則」に基づく道徳を提起し、ウェルビーイング最大化という概念を道徳理論に必ずしも持ち込む必要はないと論じた。こうした議論は、ウェルビーイングが普遍的な「善」と個々人の「幸福」との間で揺れ動いてきたことを物語っている。

心理学の領域では、Diener と Seligman (2002) が「非常に幸福な人は例外なく豊かな社会的関係を持っている」と指摘し、幸福における人間関係の重要性を浮き彫りにした。社会的関係は幸福に不可欠だが、それだけでは十分条件にはならない点が示唆的である。観光研究では、Chryssooula ら (2024) が、観光とウェルビーイングの関係が快楽的效果から意味づけや長期的変容へと進んでいると述べ、コロナ禍以降、観光は心理的・精神的健康を回復する手段として注目されていると報告している。

QOL 研究もまた、ウェルビーイング理解に深く関わっている。Adalberto ら (2020) は、客観的ウェルビーイング (所得、雇用、医療、環境など) と主観的ウェルビーイング (感情、満足度、人生評価) を区別し、生活の質は各領域の満足度から積み上げられるとする「bottom-up spillover theory」を提示した。OECD (2020) はウェルビーイングを「人々の生活状況と生活の質を指す多次元的概念」と定義し、物質的側面と非物質的側面を統合する政策指標として整備している。こうしてウェルビーイングは「測れる幸福」としての性格を強め、日本の政策文脈においても、内閣府³や厚生労働省⁴は OECD⁵や WHO の健康概念を参照しつつ、主観的ウェルビーイングを「生活の楽しさ」「面白さ」といった主観的感覚の集計から社会全体の状態を測ろうと試みている。しかし、ここでの主体はあくまでも個人であり、社会関係資本や自然環境など、持続可能性の視点はまだ十分に展開していないように思われる。

こうして見れば、ウェルビーイング研究は、古代の哲学か

ら現代政策まで、幅広く展開しながら、しばしば「測れる幸福」へと収斂してきたことがわかる。だが、そこで見落とされてきたのは、人との出会いや縁といった偶然性であり、その巡り合わせがもたらす意味である。私が本論で導入する「仕合わせ」という概念は、まさにその空白を補おうとする試みである。幸福を数値に置き換えるだけでは見えてこない、関係性の重みや偶然の力。そこにこそ、地域ウェルビーイングを再考する鍵が潜んでいる。

2.2 地域社会と外部関与に関する先行研究

「関係人口」という言葉が、政策の文脈で本格的に用いられるようになったのは、2010 年代の後半に入ってからのことである。とりわけ総務省が 2018 年度に始めた「関係人口創出事業」、さらに翌年度以降の「拡大事業」が転機となり、全国の自治体の施策に広がっていった。定住人口や交流人口に続く「第三の人口」と位置づけられ、観光以上・移住未満の多様な関わりを示すものとして注目を集めたのである。その背景には、人口減少と高齢化に直面する地方圏において、地域づくりの担い手不足が深刻化していたことがある。総務省は、地域外の人材が地域の新しい担い手となることを期待し、関係人口という枠組みを積極的に制度化した。

ところで、制度が整えられるほどに、現場では「そもそも、地域側はどう受け止めているのか」という問いも浮かび上がる。自治体によっては「ふるさと住民登録制度」を試み、二地域居住や継続的なつながりを模索する動きも出てきたが、地域社会との関係性の深さをどう測るかは、依然として、難しい課題である。

学術研究においても、この課題に応答する形で、関係人口の理論化と実証研究が進められてきた。橋本 (2022) は観光まちづくりとの関連から、観光以上・移住未満の多様な関わりに注目し、関係人口の概念的整理を行った。杉本ら (2020) は全国調査によって、関係人口の存在規模と関与の多様性を実証し、田原・敷田 (2023) は観光経験を通じた交流人口から関係人口への移行可能性をモデル化した。さらに藺 (2024) はワーケーション施策を事例的に分析し、制度設計や官民連携が関係人口創出に寄与することを示した。これらは、関係人口の広がりや政策的意義を明らかにした点で重要な到達点といえる。しかし同時に、それらの研究は関係人口が「いかに関わるか」に重点が置かれがちであり、地域住民の受容や主体性についての考察は必ずしも十分ではない。この空白を補うのが、住民受容の研究である。

まず社会的交換理論である。Homans (1958) は、人間の行動を「報酬」と「コスト」の取引としてとらえた。Blau (1964) はそこに社会構造や権力の視点を加え、交換が社会秩序を

³ 内閣府政策統括官 (経済システム担当) (2024) 「満足度・生活の質に関する調査報告書 2024～我が国のウェルビーイングの動向」において、基本的に個々人の生活満足度を集計した「社会の状態」であり、すなわち、集計的な個人の集合として捉えている。

⁴ 厚生労働省の「雇用政策研究会報告書 概要」におい

て、ウェルビーイングとは、個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念と記載している。ここでも主体はあくまでも、個人である。

⁵ 国家間比較が可能な「政策指標」としての性格が強い。

形づくることを論じた。こうした議論を観光に応用した代表例が Ap (1992) である。Ap は、住民が観光を「利益」と「負担」の両面から判断し、その釣り合いによって態度が決まることを示した。単純ながら説得力のあるモデルであり、その後の研究の基盤となった。

一方で、観光開発の進展に伴って住民感情がどう変化するかを段階的に描いたのが Doxey (1975) のイリデックス (Irridex) モデルである。観光の初期段階では期待や熱狂が見られるが、やがて無関心、いら立ち、そして敵意へと移行する。

表 1. Doxey のイリデックスモデル

① Euphoria (熱狂)	観光客の来訪を歓迎、地域経済や文化交流への期待が高まる
② Apathy (無関心)	観光が日常化し、住民は観光客を“収入源”としてみるようになる
③ Annoyance (苛立ち)	混雑や生活コスト上昇などの負の影響が顕在化し、住民の不満が増す
④ Antagonism (敵意)	観光客を批判、拒否する態度が現れ、地域社会と観光との対立が深まる

Doxey (1975) より筆者作成

Doxey のイリデックスモデルは、観光開発の「負の側面」を段階的に捉えることで、住民のウェルビーイングの低下プロセスを説明した。どちらかという、負の連鎖を回避あるいは警告するためのモデルであり、過剰観光、摩擦を未然に防ぐためには有効である。しかし、観光を「歓迎→拒絶」という直線的な変化で捉えすぎることがゆえに、関係人口や強制的な観光の「協働的な関係性」は想定されていない。

Carmichael (2006) は、観光体験の質を観光客だけの問題にせず、住民や地域社会の生活の質と結びつけて考えるべきだと指摘した。Carmichael は観光研究に「トリプル品質モデル」を導入した。すなわち、観光客の体験の質、住民の生活の質、観光地としての持続可能な発展。つまり、観光の成否は、住民の誇りや満足をいかに高められるかにかかっているという視点は、Doxey の警告を補い、正の連鎖を育む方向を示すものである。

こうした研究は、住民受容の理論化に大きな足跡を残している。しかし、それらは基本的に「利益とコスト」「感情の変化」という測定可能な枠組みで住民を描き出しており、偶然の出会いや縁といった、数値化しづらい側面には光が当たりにくい。特に島嶼地域のように共同体意識が強い社会では、外部者との関係は単なるコスト・便益計算では説明しきれない。日本の島に暮らす人びとの中には、新渡戸稲造が『武士道』に描いたような倫理観にも通じる、独特の慎み

や縁の重視が息づいている。都会ではよそ者との接触は日常的であるが、島では一人の来訪者が共同体の未来を左右するほど大きな意味を持つことがある。

私が小値賀町で見た「量より質」「縁を重んじる」「住民の望む速度に合わせる」という姿勢は、まさに先行研究の枠組みでは十分に説明できない部分である。偶然の「仕合わせ」をどう理解するか——その視角を加えることで、住民受容研究の射程を広げることができるのではないかと考える。

2.3 本研究の立脚点

本研究における「仕合せ」とは、数値化し得る満足度や効用ではなく、偶然の出会いや巡り合わせ、縁の積み重ねが生活物語に編み込まれるプロセスを指す概念である。語源的には「為合せ」「仕合せ」に遡り、物事の成り行きがうまく合うこと、巡り合わせがよいことを意味していた。本論ではこれを、数量化できない人と人との関係の質を捉えるための枠組みとして用いる。

もともと、このような抽象的な概念は、そのままでは経験的研究に取り込むことが難しい。高根 (1979 : 1995) が指摘するように、一般的な「概念」は具体的観察に媒介されることで初めて経験的世界に結びつく。

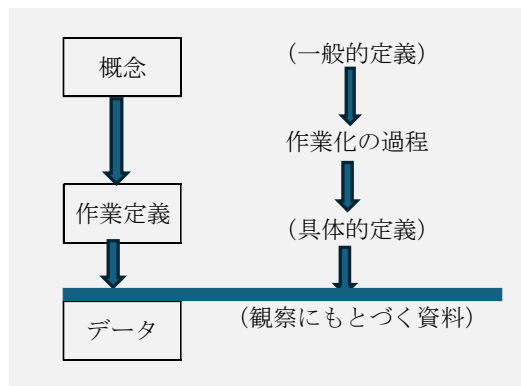


図 1. 概念と作業定義の関係

出典：高根 (1979 : 1995) : 64

そのため研究では、高根は観察可能な「指標」や「作業定義」を設定することが不可欠である、と主張する。本研究における「量より質」「縁の制度化」「住民の望む速度」という三つの視点は、「仕合せ」という抽象的な概念を、実際の地域の出来事や人の行動に結びつけるための手がかりとして働く。とくに「量より質」は、出会いの多さではなく、ひとつひとつの出会いを丁寧に関係へと育てていく姿勢を示している。「縁の制度化」は、偶然の出会いを一度きりにせず、再会や役割づくりを通して継続的な関わりへとつなげていく工夫を意味する。そして「住民の望む速度」は、宮本常一 (1969 : 1997) が述べたように、経済の仕組みの中に助け合いや共生の精神を取り戻すという考え方と重なっている。すなわち、急激な変化ではなく、地域の暮らしのリズムに合わせて少しずつ外の世界とつながっていく。そのような調和の感覚こそが、地域の「仕合せ」を支える基盤となる。

これまで確認してきたように、関係人口論は外部からの関わりに光を当て、その政策的意義や広がりを示してきた。住民受容研究もまた、利益とコストの均衡や感情の変化といった観点から、住民の態度を理論化してきた。しかし、そのいずれも、偶然の出会いや巡り合わせ、縁の積み重ねといった要素を十分に掬い取ってはいない。地域社会に生きる人びとにとって、外部者との関係は単なる損得の計算だけではなく、生活の物語の一部となるからである。

小さな出会いの積み重ねが、人と人との関係を変え、やがて地域の未来を左右する。島の社会ではとりわけ、この「偶然の仕合わせ」が共同体のあり方を決定づけてきた。都会では外部者との出会いは日常に埋もれてしまうが、島では一度の訪れが未来を左右することもある。宮本常一（1984『忘れられた日本人』岩波文庫）が描いた離島の暮らしにせよ、柳田國男（1946『先祖の話』筑摩書房）が語った「縁」にせよ、日本の島社会は、よそ者を無条件に排除するのでもなく、また即座に受け入れるのでもない、独特の関係の結び方を育んできた。それは時間をかけて培われる信頼であり、弱い紐帯が少しずつ強い紐帯へと変わっていく過程に近い。

本研究は、こうした文化的・社会的背景をふまえつつ、数量化された「ウェルビーイング」と偶然の「仕合わせ」を接合する視座を提示することを目指す。その立脚点は、「住民が望む速度と方向に寄り添いながら、外部者との縁を仕合わせとして積み重ねる」という漸進的共創の視点にある。長崎県小値賀町の事例を通じて、こうした視点がどのように地域ウェルビーイングを豊かにしうるのかを検討したい。

3. 長崎県小値賀町の事例

本研究では、日本 47 都道府県で最も島の数が多い長崎県（2022 年では 1,479 島）⁶に注目する。中でも、もっとも人口規模が小さい北松浦郡小値賀町（島民 2,065 人）⁷を取り上げる。

3.1 調査地域の概要

小値賀町は、長崎県五島列島の北端に位置する外海離島である。小値賀本島を中心に、大小 17 の島々からなる火山起源の群島で、総面積は 25.46 ㎢である。島嶼部でありながら地勢は比較的平坦で、入り組んだ海岸線が特徴である。気候は対馬暖流の影響を受け、温暖で年較差は小さい。年平均気温はおよそ 17 度である。他方、風は強い。とりわけ冬季の北西季節風は厳しく、体感値は数字以上になる。

人の営みも古い。旧石器時代まで遡る痕跡があり、『肥前国風土記』に名が見える。往古には日宋貿易船の寄港地でもあった。藩政期には平戸藩松浦家の所領である。廃藩置県後は笛吹・前方・柳の三村に分かれて自治が敷かれ、大正 5 年（1916 年）に合併して小値賀村、昭和 15 年（1940 年）に町制施行、令和 2 年（2020 年）に町制 80 年を迎えた。

⁶ 国土交通省国土地理院「日本の島の数」（令和 4 年 1 月時点の電子国土基本図を用いて計数。）

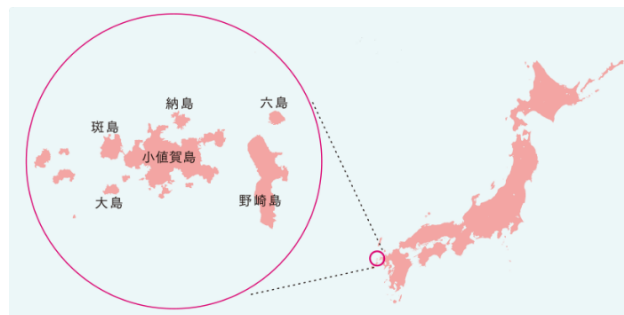


図 2. 小値賀のアクセス

出典：おぢかアイランドツーリズム協会

アクセスに関しては、現在の定期交通は海路のみである。起点の佐世保まで約 90 km。フェリーが 1 日 2 往復（所要 2 時間半～3 時間）、高速船が 1 日 2.5 往復（同 1 時間半～2 時間）運航する。福岡発のフェリーも 1 日 1 往復（所要約 5 時間）ある。かつては ORC（旧長崎航空）が長崎・福岡と結ぶ定期便を運航したが、採算上の理由で平成 18 年に廃止された。現在、空路は主として救急搬送用ヘリに限られる。

外海に面するため、冬の季節風と潮風は農作に影響を与える。夏から秋にかけては台風が来航し、農漁業のみならず船便の欠航を通じて生活全般に及ぶ。ゆえに島周縁や田畑には、防風・防潮・魚つき林としてクロマツが育成されてきた。島の中央に延びる約 500 メートルの松並木「姫の松原」は、昭和 58 年（1983 年）に「日本の名松百選」に選定された名所である。観光資源である前に、暮らしを支えるインフラである。

⁷ 公益財団法人国土地理協会、「2025 年 4 月調査、市町村別人口・世帯数」による。

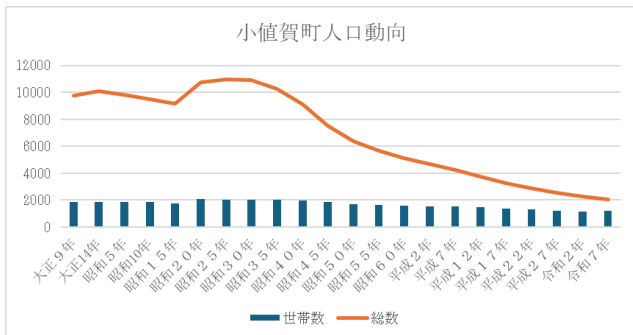


図3. 小値賀町の人口動向

出典：小値賀町役場 HP の公式データより筆者作成
(※令和7年の数字は、令和7年8月末の時点である)

図3に示すとおり、小値賀の人口は年々減少している。主因は二つである。第一に、年間50～60人の死亡に対し、出生が約10人にとどまる「自然減」。第二に、島内に大学がなく、高校卒業生の多くが進学・就職のため島外へ転出することによる「社会減」である⁸。

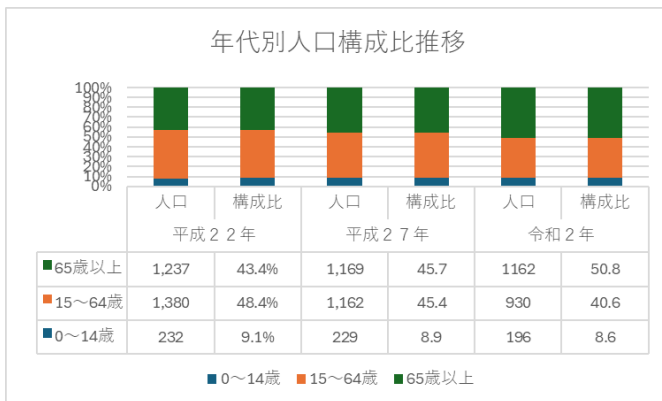


図4. 小値賀町 年代別人口構成比推移

出典：小値賀町役場視察資料より筆者作成

図4に示すとおり、年齢構成の変化は鮮明である。平成27年（2015年）から令和2年（2020年）にかけて総人口は2,560人から2,288人へマイナス10.6%。内訳を見ると、生産年齢人口（15～64歳）は1,162人から930人へマイナス20.2%となり、年少人口（0～14歳）も229人から196人へマイナス14.4%。他方、高齢人口（65歳以上）の構成比は45.7%から50.8%へと過半に達した。

表2. 令和2年（2020年）と平成7年（2015年）の比較表

調査年	R2/H27	R2参考（長崎県）	
人口	増減比	人口	構成比
0～14歳	▲14.4%	164,573	12.5%
15～64歳	▲20.2%	714,726	54.5%
65歳以上	▲0.6%	433,018	33.0%
合計	▲10.6%	1,312,317	100.0%

出典：小値賀町役場視察資料

長崎県平均（令和2年）と比べても差は大きい。小値賀の年少8.6%（県12.5%）、生産年齢40.6%（同54.5%）はいずれも県水準を下回り、高齢は50.8%（同33.0%）と大きく上

回る。すなわち、若年層・生産年齢層の縮小が進む一方で、高齢化が一段と進展した地域であることが分かる。

表3に示すとおり、本町の基幹産業は農業と漁業である。

表3. 小値賀町の産業構造

産業	業務	実数 (人)	構成比 (%)
第1次	農業	197	17.6
	漁業	126	11.3
	小計	323	28.8
第2次	建設業	67	6.0
	製造業	34	3.0
	小計	101	9.0
第3次	運輸業・郵便業	35	3.1
	卸売業・小売業	125	11.2
	宿泊業	58	5.2
	サービス関連業	33	2.9
	教育学習支援	78	7.0
	医療福祉	152	13.6
	複合サービス業	41	3.7
	他に分類されないもの	56	5.0
	公務員	106	9.5
	その他	12	1.1
	小計	696	62.1
計		1,120	100.0

出典：小値賀町役場視察資料

かつては漁業者が多かったが、魚価の低迷、燃油・資材の高騰、磯焼けの進行、生産者の高齢化と後継者不足が重なり、就業者は年々減少している。後継者育成制度、漁船燃油への補助、輸送コスト支援などの施策を講じてはいるものの、厳しい状況が続いている。農業についても、一般財団法人「小値賀町担い手公社」が後継者育成事業等により担い手確保に努めているが、対外的な競争環境は厳しく、生産者の高齢化と後継者不在が課題である。

以上のとおり、一次産業の基盤は細っている。他方で、本町は「量より質」を旨とする滞在型観光を、生活と自然を資源に据えて育ててきた。外部資本依存の開発ではなく、住民の暮らしを起点にした小規模・分散の受入である。この方向は、雇用や所得の補完に資するだけでなく、地域の誇りや関係の網目を厚くする点で、町のウェルビーイングに通じる。つぎに、その形成と運営の歩みを整理する。

3.2 受入体制の形成と運営

受入の端緒は、1990年代末の野崎島における自然体験キャンプにある。2001年前後には、体験・環境教育を継続実施できる運営の型が整い、安全管理や案内の手順が磨かれた。来訪者は「客」ではなく「学び合う相手」である。この姿勢が「量より質」をめざす小値賀の受入の芯となった

料」。

⁸ 出典：令和7年7月「長野県北松浦郡小値賀町視察資

(田代 2011)。

本格化に先立ち、体験の通年化と住民参加の裾野を広げるため、2005 年 11 月に「小値賀町アイランドツーリズム協議会」が発足し、同年、7 軒が体験民宿の許可を取得して民泊が動き出した。2007 年には既存の観光協会・自然学校等を束ねる常設組織として NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会（通称 IT 協会）が設立され、企画・手配・人材育成の中核を担う。さらに 2009 年、小値賀観光まちづくり公社が加わり、行政（基盤整備・指定管理）、NPO（企画運営・窓口）、住民（受入主体）が噛み合う三位一体の枠組みが整った（深見ほか 2015）。

その後の運営も安定していた。公的施設（野崎島ビジターセンター、自然学塾村、古民家ステイ等）の指定管理や、予約・手配・情報発信を一元化するワンストップ窓口が年次的に継続し、少人数・多品目の受入を無理なく捌く体制が定着した。教育・体験は中核であり、「島らいい」「宝島」「自然体験」「民泊」はコロナ期を含めて持続し、運営規模は数十～数百人単位の“顔が見える”範囲に保たれている（例：2024 年度「宝島」54 名、「島らいい」29 名、自然体験 662 名、民泊 296 名）。拙速な拡大を避け、資源保全と安全を優先する運びである（2020-2024 年度事業報告書より）。

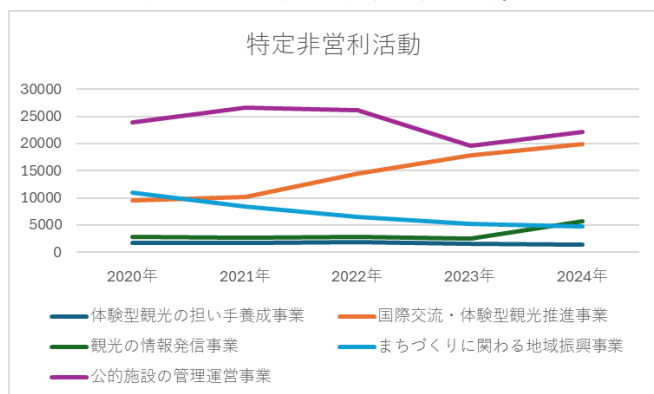


図 5. アイランドツーリズムの特定非営利活動 (単位: 千円)
出典: 2020-2024 年度事業報告書より筆者作成

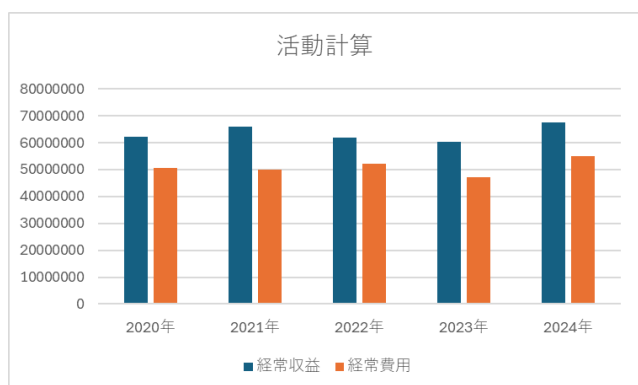


図 6. アイランドツーリズムの活動計算書 (単位: 円)

出典: 2020-2024 年度事業報告書より筆者作成
財務と事業配分にも、この方針は表れている。2020～2024 年で「国際交流・体験型観光推進」は約 2 倍に伸び、情報発信も強化された。他方、担い手養成や広義の地域振興は立ち

上げ期から運用期へと比重を移し、公的施設の管理運営は基盤業務として安定推移した。全体として、体験プログラムの磨き上げ、来訪者との接点の質、そして現地オペレーションの堅実さに資源配分が寄っている。

以上の経緯を通じて、小値賀の受入は、「暮らしを資源化し、顔の見える密度で受け止める」方式へと漸進的に整えられてきた。指定管理と島内ワンストップの運用、継続型の教育・体験プログラムに加え、体験・交流分野への支出比率の上昇が、その方向性を裏づける。これらは雇用・所得の補完にとどまらず、受け手の誇りや物語の形成、再訪・紹介を通じた弱い紐帯の更新に寄与している可能性が高い。したがって本稿では、数量化可能なウェルビーイング指標と併せて、偶然の出会いが積み重なり「仕合わせ」となる基盤が、運営の設計を通じて醸成されていると仮説する。

3.3 考察

ここで考察する視角は三つである。第一は「量より質」、すなわち、単に来訪者数の拡大を追うのではなく、受入の規模を意図的に抑え、小規模で反復可能な形態を維持しながら、滞在の深まりや密度を重視してきたかどうか、という点である。第二は「縁の制度化」である。それは、民泊や体験活動を通じて生じる一時的な交流が、再訪や紹介といった継続的關係、さらには担い手の育成へと結びつくように仕組み化されているかどうかである。第三は「住民の望む速度」である。すなわち、急激な受入拡大を避け、受入規模の上限設定や中止判断を含めた運営が、住民の負担感や生活リズムに調和する形で行われているかどうかである。

まずひとつめの「量より質」について、小値賀の滞在型受入は、大きく古民家ステイと民泊の二種類がある。両者はいずれも“顔の見える密度”を守る設計で、体験の濃度と生活の節度を両立させている。

古民家ステイは、島内の複数集落に点在する六棟を一棟一組で貸し切る方式である。定員は棟ごとに二～六名と小ぶりに設定され、チェックイン 14 時・チェックアウト 11 時を標準とする。各棟には台所・浴室・空調・リネンが備えられ、自炊が可能である一方、火気厳禁や屋外バーベキュー・花火の禁止、強い匂いを伴う調理の抑制など、保全と安全を優先する規程が敷かれている。アメニティは環境負荷の低いものを採用し、維持管理は町の枠組みのもとで、運営は NPO が委託を受け、清掃や庭の手入れも島内の人手で賄われている。

宿泊料金は、春・秋・冬の通常期（A 期）と、夏や大型連休などの繁忙期（B 期）に分けて設定される。A 期では、たとえば二名利用で一人あたり 15,000 円前後、三～四名利用では一人あたり 14,500 円程度に抑えられる棟もある。これに対して B 期は一人あたり 2～4 割程度高く設定され、需要の集中を調整する仕組みになっている。さらに、同一棟に連泊する場合には A 期で最大 40%、B 期でも 20%までの割引が適用され、短期の大量回転ではなく、少人数での長逗留を

促す構造になっている。また、博多発フェリー利用者を対象に、追加料金を支払えば早朝チェックインが可能となるなど、島へのアクセス実態に合わせた柔軟な運用も組み込まれている。

要するに、物理的上限（棟数・定員）と運用規律（禁止事項・環境配慮・連泊優遇）、さらには料金設計（期別差・割引制度）を組み合わせ、意図的に受入密度を制御する仕組みとなっている。

一方、民泊は、小値賀の漁師や農家など一般の家庭に観光客を迎え入れ、家族と同じように食卓を囲み、生活の一部を共有するホームステイ型の受入方式である。2006年に始まり、以来、国内外からの来訪者との交流が続いており、住民にとっても出会いが大切な財産となってきた。受入は1日1組限定を原則とし、規模を抑えることで、ホストと宿泊者が顔の見える関係を築きやすくしている。標準的なプログラムでは夕食を共同調理する体験が組み込まれ、釣りのなどのオプション体験は別途申し込みとなる。

表4. 民泊のプラン料金

人数	価格／ひとり	内容
2名以上 ※6名以上の場合は分宿	15,000円（税抜き）	基本民泊体験 1泊2食（朝・夕） + 保険料 ※7歳以上は大人数料金。
1名	18,000円（税抜き）	
こども	無料（0～3歳） 10,000（4歳～6歳）	

出典：小値賀島旅 HP より筆者作成

民泊は「島の暮らしそのものを体験する」ことを中心に据え、受け入れる人数や関わり方をあえて小さく保ちながら、持続的で親密な交流の場を守ってきた。古民家ステイが、歴史ある建物を生かしながら快適な滞在環境を整えることに重きを置くのに対し、民泊は住民の家に入り込み、食事や日常を共にすることで関係を育むことに特徴がある。両者は性格こそ異なるが、互いを補い合いながら、小値賀らしい受け入れの形を作り上げている。実際、筆者自身も2025年9月9日と10日にそれぞれ異なる家庭に宿泊した。体験はまさに「ホームステイ」といえるもので、食卓を共にしながら島の人びとの日常に触れるなかで、旅館やホテルのようなサービスとは異なる、生活に溶け込むような時間を過ごすことができた。

まさに Carmichael (2006) が指摘するように、観光客にとっての良質な体験は、それを受け入れる住民の幸福感や生活満足度が確保されていることによって初めて成り立つ。観光が住民の負担となれば体験の質も損なわれるが、逆に住民自身が誇りや喜びを感じながら関わるとき、その充足は来訪者の体験に反映される。小値賀の受入は、この「住民のウェルビーイング」と「観光者の仕合わせ」を同時に成り立たせる仕組みとして設計されていると考えられる。

第二に「縁の制度化」である。小値賀における体験プログラムでは島民が先生となり、民泊では「家族と同じ食卓」を囲む設計に基づいている。来訪者は単なる顧客ではなく、ともに学び合う相手として迎え入れられる。こうした小さな接触が再訪や紹介を呼び込み、弱い紐帯が繰り返し更新されていく。この受け入れの基盤を形づくったのは、一人のよそ者である。大阪出身の高砂樹史は、田舎暮らしを望んで移住先を探す中で偶然小値賀に出会い、2005年に妻子とともに移住してきた。小値賀町はそれまで観光に携わった経験はなかったが、高砂氏が町民に繰り返し説明を重ねることで少しずつ町民の理解を得て、観光振興の仕組みを形にしていっていった。その経緯は田代（2011）に詳述されている。重要なのは、この出会いが偶然であったという点である。高砂一家はのちに島を離れた。しかし、彼らの手で築かれた仕組みは今も細々でありながらも継承されている。もしあのとき、高砂が別の土地を選んでいたら、小値賀の制度は存在しなかったかもしれない。制度の背後には、常に人がいて、その出会いの偶然がある。小値賀の「縁の制度化」は、そうした一つの偶然から芽生え、制度として根を張ったものなのである。

一方で、教育分野における制度化の取り組みは別の流れを持つ。故郷留学の受入事業は、平成26年度に発足した「故郷留学調査検討研究会」に始まり、平成30年度にはモニター制での受入を行い、令和元年度から本格的に募集が始まった。令和2年度には寮建設に関する作業部会が設置され、令和3年度に故郷留学施設「ちかまる寮」が竣工した。令和6年度の受入は2名、累計12名の留学生を受け入れている。民泊や古民家ステイが観光客との接点を紡ぐ仕組みであるのに対し、故郷留学は教育制度の内部に縁を組み込み、継続的な関係形成を前提とする制度として定着している。

小値賀における「縁の制度化」は、このように二つの流れを持って展開してきた。すなわち、偶然の移住者によって立ち上げられた民泊という観光制度と、町主導で制度化された故郷留学という教育制度である。両者はいずれも、偶然の出会いを起点にしながら制度として持続する枠組みへと発展し、地域ウェルビーイングの基盤を形づくっている。

第三に「住民の望む速度」である。小値賀町の観光・交流施策は、拙速な拡大を避け、住民生活のテンポと調和する速度で運営されてきた。町の総合計画においても、将来像を「一人一人が輝き、小さな幸せに満ちたまち 小値賀町」と定め、人口目標を「各学年15人の児童・生徒を確保」とするなどきわめて現実的で控えめな方針を掲げている。基本戦略も「ひと」「くらし」「しごと」「協働のまちづくり」「行政力」を柱とし、経済的成長よりも地域の持続性と生活の質（QOL）の維持に重きを置いている（第5次小値賀町総合計画）。

実際、島民への聞き取りでも「自分たちには今ののんびりした暮らしが合っている」「隣の宇久島はがつつしている

が、小値賀は無理をしない」という声を得られた。つまり「どの速度で受入を進めるか」そのものが、住民の QOL に直結している。

移住者の推移も、この漸進性を裏づける。平成 9 年度(1997 年) から令和 7 年度(2025 年) までに 442 人が移住し、そのうち 236 人が定着している。年間の新規移住は 10~30 人前後で推移しており、大量流入や急増はみられない。定住率はおおむね半数程度であり、短期的な人口増加ではなく「島のリズムに合う人が少しずつ根づいていく」形で積み重なっている。

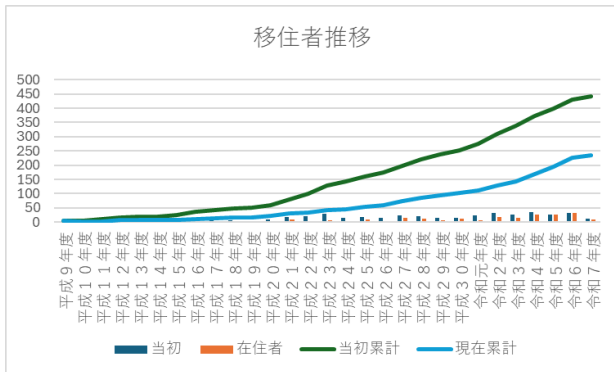


図 7. 小値賀町移住者推移グラフ

出典：小値賀町未来創造課神崎氏作成資料より引用

これはサステナビリティ論における「適正速度の発展 (pace of sustainability)」の実例ともいえる。急激な変化よりも緩やかな歩みが、地域社会と自然環境の双方に安定をもたらしている。したがって小値賀の受入は、単なる経済指標では測れない「住民の望む速度」を基準に設計されており、そのことが QOL と観光品質の相互補完を可能にしていると考えられる。

4. 結論

本論の出発点は、清水幾太郎が「幸せ」ではなく「仕合せ」と記したことへの好奇心であった。「仕合せ」には、偶然や巡り合わせ、環境や人との関係といった、個人の意思を超えた次元が含まれている。他方で、観光研究を含む近年のウェルビーイング論は、しばしば測定可能な幸福指標に収斂する傾向が強い。この両者をどう接合できるのか——これが本稿の問いであった。

小値賀町の事例からは、三つの視角が浮かび上がった。第一に「量より質」は、受入密度を意図的に制御し、生活のリズムと観光体験の双方を保つ設計として現れていた。第二に「縁の制度化」は、民泊や教育プログラムを通じて偶発的な出会いを反復可能な関係へと編み直す制度的枠組みとして確認された。第三に「住民の望む速度」は、拙速な拡大を避け、生活と調和した発展テンポを維持する実践として示された。これら三点は、Carmichael の「住民 QOL と観光体験の連関」を基層で支え、さらにサステナビリティ論における「適正速度の発展 (pace of sustainability)」を具体化する事

例と位置づけられる。

これら三視点は同時に、高根 (1979: 1995) が述べる「作業定義」としての意味を持つ。すなわち抽象概念である「仕合わせ」を、そのままでは測れない理念としてではなく、具体的に観察・記述可能な経験的証拠へと橋渡しする媒介である。小値賀における営みは、測れる幸福 (well-being) と測りがたい「仕合わせ」とを作業定義を通じて媒介するメカニズムの存在を実証的に裏づけた。

すなわち、偶発性と制度性の結合を通じて、地域社会はウェルビーイングの厚みを増しているのである。小値賀の事例は、その接合の一つのモデルを提示している。

今後の課題としては、第一に「仕合わせ」という視点の普遍性と多様性を理論化する作業が挙げられる。小値賀町の事例に限らず、他地域の実践や異なる文化的背景を持つ地域と比較することで、この概念がどの程度広く適用可能かを検証する必要がある。第二に、こうした「測れない幸福」をいかに政策議論に取り込むか、という課題である。数量化指標に依拠する政策枠組みと、偶然性や縁を重んじる文化的要素をどのように調和させるかは、今後の地域づくりや観光政策にとって大きな挑戦となるであろう。

謝 辞

本研究は、令和 7 年度長崎県立大学学長裁量研究助成を受けて実施したものである。ここに記して深甚なる謝意を表す。また、インタビュー調査や資料提供に際しご協力いただいた、小値賀町未来創造課、産業振興課、教育委員会、おぢかアイランドツーリズム協会、シマウマ商会、地域おこし協力隊の皆さまに心より感謝申し上げる。

参考文献 (日本語)

- 1) 小値賀町郷土史編纂委員会, 1978, 『小値賀町郷土史』: 264-379.
- 2) 国土地理院, 2025, 「日本の島の数」, 国土交通省国土地理院, https://www.gsi.go.jp/kihonjohochousa/islands_index.html (2025 年 9 月 14 日アクセス).
- 3) 国土地理協会, 2025, 「2025 年 4 月調査 市町村別人口・世帯数」, 公益財団法人国土地理協会, <https://www.kokudo.or.jp/service/data/map/nagasaki.pdf> (2025 年 9 月 14 日アクセス).
- 4) 産業・地域システム研究会, 2018, 『長崎県小値賀島の魅力的〈ひと・まちづくり〉—産業・地域研究 20 年への歴史的視座— (Discussion Paper No.124)』名古屋学院大学総合研究所.
- 5) 清水幾太郎, 1995, 『私の文章作法』中央公論社.
- 6) 杉本あおい・杉野弘明・上田昌子・船坂香菜子, 2020, 「現代社会における『関係人口』の実態分析: 全国アンケート調査の結果から」『沿岸域学会誌』Vol. 33/No. 3: 49-58.
- 7) 菌諸栄, 2024, 「地方自治体の輪—ケーション推進による関

係人口の創出—青森県青森市と静岡県下田市を事例として」『地域活性研究』20 巻：87-96.

- 8) 高井典子, 2022, 「観光に対する住民の態度へのプレイス・アイデンティティ理論適用の検討」『日本国際観光学会論文集』第 29 号：7-16.
- 9) 高根正昭, 1979, [1995 年第 15 刷], 『創造の方法学』, 講談社.
- 10) 田代雅彦, 2011, 「条件不利地におけるツーリズム事業の発展要因：長崎県小値賀町の事例」『九州大学経済論究』139：77-98.
- 11) 田原洋樹・敷田麻実, 2023, 「交流人口から関係人口への変容可能性の検討—観光経験による関与意識醸成と地域への継続的な関わり意向と関係」『観光研究』Vol.34/No 2:49-64.
- 12) 特定非営利活動法人おぢかアイランドツーリズム協会, 2021, 『令和 2 年度事業報告書』, 特定非営利活動法人おぢかアイランドツーリズム協会.
- 13) —2022, 『令和 3 年度事業報告書』, 特定非営利活動法人おぢかアイランドツーリズム協会.
- 14) —2023, 『令和 4 年度事業報告書』, 特定非営利活動法人おぢかアイランドツーリズム協会.
- 15) —2024, 『令和 5 年度事業報告書』, 特定非営利活動法人おぢかアイランドツーリズム協会.
- 16) 長崎県北松浦郡小値賀町, 2025, 「視察資料」
- 17) 長崎県北松浦郡小値賀町, 2025, 「概要版 第 5 次小値賀町総合計画」
- 18) 農林水産省, 2012, 「農林水産大臣賞受賞. 小さな島の大きな挑戦. 受賞者おぢかアイランドツーリズム協会」
- 19) 橋本行史, 2022, 「関係人口概念の考察—観光まちづくりとの関わりを中心として」『政策創造研究』第 16 号：55-84.
- 20) 葉山茂, 2023, 「『離島』における住民主体の観光開発とその展望—長崎県小値賀町の事例から」『農村計画学会誌』Vol. 42/No. 2:71-74.
- 21) 深見聡・山田有沙子・金成恩, 2015, 「アイランドツーリズムの担い手に関する研究」第 30 回日本観光研究学会全国大会学術論文集：137-140.
- 22) 前野隆司, 2013, 『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門』講談社現代新書.
- 23) 松村茂, 2025, 「開発場所を選ばないワーケーションがもたらす新しい観光地—ワーケーションの本質からの考察」『東北芸術工科大学紀要』第 32 巻：1-10.
- 24) 見田宗介, 2006, 『社会学入門』岩波書店.
- 25) 宮本常一, 1969(1997 7 版) 『日本の離島 第 1 集』未来社.
- 26) —, 1984, 『忘れられた日本人』岩波文庫.
- 27) 柳田國男, 1946, 『先祖の話』筑摩書房.

参考文献（英語）

- 1) Ap, John, 1992, "Residents' Perceptions on Tourism

Impacts," *Annals of Tourism Research* 19(4): 665–690.

- 2) Blau, Peter M., 1964, *Exchange and Power in Social Life*, New York: John Wiley & Sons. (2nd printing, January 1967).
- 3) Carmichael, Barbara A., 2006, "Linking Quality Tourism Experiences, Residents' Quality of Life, and Quality Experiences for Tourists," in *Quality Tourism Experiences*, edited by Gayle Jennings and Norma Nickerson, London: Routledge.
- 4) Cummins, Robert A., 2005, "Moving from the Quality of Life Concept to a Theory," *Journal of Intellectual Disability Research* 49(10): 699–706.
- 5) Diener, Ed, and Martin E. P. Seligman, 2002, "Very Happy People," *Psychological Science* 13(1): 81–84.
- 6) Diener, Ed, 1984, "Subjective Well-Being," *Psychological Bulletin* 95(3): 542–575.
- 7) Doxey, George V., 1975, "A Causation Theory of Visitor-Resident Irritants: Methodology and Research Inferences," in *The Impact of Tourism: Sixth Annual Conference Proceedings*, San Diego: The Travel Research Association: 195–198.
- 8) Homans, George C., 1958, "Social Behavior as Exchange," *American Journal of Sociology* 63(6): 597–606. Chicago: The University of Chicago Press.
- 9) Klein, Susanne, 2022, "Living the Life of My Choice: Lifestyle Migrants in Rural Japan Balancing between Local Commitment and Transnational Cosmopolitanism," *Asian Ethnology* 81(1–2): 107–124.
- 10) Konstantopoulou, Chrysoula, Sotirios Varelakis, and Panagiotis Liargovas, 2024, "Well-Being and Tourism: A Systematic Literature Review," *Economies* 12(10): 281.
- 11) Michalos, Alex C., and Dan Weijers, 2017, "Western Historical Traditions of Wellbeing," in *Handbook of Quality of Life*, ed. by Filomena Maggino, Cham: Springer: 31–57.
- 12) Moore, George E., 1903, *Principia Ethica*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 13) OECD, 2020, *How's Life? 2020: Measuring Well-Being*, Paris: OECD Publishing.
- 14) Santos Junior, Adalberto, Fernando Almeida Garcia, Paulo Morgado, and Luiz Mendes-Filho, 2020, "Residents' Quality of Life in Smart Tourism Destinations: A Theoretical Approach," *Sustainability* 12(20): 8445.
- 15) Scanlon, Thomas M., 1998, *What We Owe to Each Other*, Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press.
- 16) Smith, Melanie Kay, and Anya Diekmann, 2017, "Tourism and Wellbeing," *Annals of Tourism Research* 66: 1–13.